



カナダの男子生徒が、着ていたピンク色のシャツをからかわれて、いじめられました。それを知った上級生が、周りの友だちに「みんなでピンクのシャツを」と声をかけたところ、ピンク色のシャツやリストバンド、リボンなどを身に付けた大勢の生徒で、学校がピンク色に染まったそうです。この実話をもとに、「いじめ」について考えるピンクシャツデー（2月の最終水曜日）ができ、世界中に広がっていきました。私も、今年



はピンク色のマスクとハンカチを身に着けて、その活動を応援しました。「いじめ」は、昔話や童話にもたくさん出てきます。現代社会においても、なくなることはなく、「〇〇〇ハラスメント」という言葉も、あらゆる場面で出てきています。南林間小学校でも「いじめ」がないわけではありません。起きてしまった時に公平公正な姿勢で、子どもたちに寄り添った対応をすることが重要であることはもちろんですが、普段の学校生活において、思いやりと尊重を大切にしていけることが、いじめの防止につながると考えています。一人ひとりが互いの違いを受け入れ、他者を尊重し、思いやりを持って接することで、学校が居心地良く、温かい場所になっていきます。

そのために、私たち職員全員は、日頃から、保護者・地域の方々からのお話を丁寧に伺うとともに、学校での子どもたちの姿や、何気ない会話から、様子を把握し、子どもたちからの相談に真摯に向き合い、子どもの立場に立って傾聴していきます。

子どもたちが、集団生活の中で規範意識や自己有用感を醸成し、よりよい人間関係を築いていく力を育ていけるよう、努めてまいります。

今月も児童全員が笑顔いっぱい、楽しく過ごす学校づくりに努めてまいります。

(校長 板坂 和明)



私が学級担任をしていた頃、「わたしのせいじゃないーせきにんについてー」という絵本を題材に道徳の授業を行っていました。どのページにもみんなに背を向け泣き続ける男の子の同じ姿、そして、まわりの子ども達の、「見ていたから知っているけどわたしのせいじゃない」「大勢で叩いていたから自分もやった。でもほんの少し」「はじめたのは私じゃない」など、「わたしのせいじゃない」という言い分が描かれています。子ども達は、「見ていただけ」「私だけじゃない」「みんながやっていたから」など、日頃自分達が言っている言葉にハッと、「いじめをしてはいけない。見ていなくてもいけない」「自分は悪くないと言うことは、他の人が悪いと言っていることになる」「責任の押し付け合いはいけない」「自分の行動に責任をもてば、いじめはなくなる」など、いじめについて考える中で各自の責任について思いを巡らせ、その重みを感じていました。

責任について考えることは、自分自身を見つめ直し、「わたしのせいじゃない」ではなく、行動や言動を振り返り直すことなのかもしれません。この絵本の後半では、戦争や公害などの写真が掲載され、私達一人ひとりの責任が問われているような気がしました。

夢いっぱいの春はもうすぐそこです。子どもたちが、自分に責任をもつことでよりよい人間関係を築けたという自信を糧に進級・進学できるよう、職員一同真摯に子どもたちに向き合ってまいります。

(教頭 小林 美紀)